



どの子ども大事にされる保育の土台は

仲嶺 真弓

もう師走。今年も足早に時が過ぎました。

先日、毎月定期購入している雑誌（“ちいさいなかま”という保育者と父母を結ぶ雑誌があります）「どの子ども大事にされる保育って？」という特集テーマに目が留まりました。

ひとり一人個性が違ってあたりまえで、個性の数だけ対応も違います。子どもの個性を掴み、その個性を大事にし、次の成長への気付きに繋がる対応を職員は日々考えています。けれど、そうありたいと思っけていても、子どもとのかかわりは「こうすればこうなる」という決まった方法はなく一筋縄ではいかないこともたくさんあるので、職員はいつも試行錯誤しながら、ひとり一人の子どもの現状を把握し、その子にあった対応を探し出します。子ども一人ひとりの個性を掴み対応を考えることは、焦って担任だけで何とかしようと必死になると、気になる点にだけに目が向きがちになることもあります。けれど、その悩みに共感しながら、こんな視点で捉えてはどうだろうか、こんな対応してみてもどう



だろうと声を掛けあえることで、緊張感が解け安心し、人や物の見方が広がり、解決の糸口が見つかることがあります。そういう職員間の連携をこれからも大事にしていける職場でありたいと思っています。そのためには、各部署会議は欠かせません。（※園では職員会議（各園での職員会議と年4回姉妹園アトムとの2園合同職員会）のほか、0・1歳児クラス、2・3歳児クラス、4・5歳児クラスの保育部署グループ会議、給食室会議、看護師会議、事務室会議、主任会議、パート職員会議など、必要に応じて2園合同で行っています。11月のパート職員会議では、この特集のテーマを題材に話をしました。立場に関係なく、1人の大人として子どもとも保護者とも関わる気持ちを根っこに持ち、子どもたちを見守りかかわっていきこうと話し合いました。

職員間では、日々の保育や会議で、子どものことを真ん中におき、それぞれの保育観や思いを語り合う機会を持っています。保護者とは、日報や、毎月発行するつばさっ子、送迎時での会話、クラス懇談会を通して伝え、考え合えることを大事にし、いろいろ企画しています。けれど伝えきれていないこともあるのが現状で、保護者にモヤモヤする思いにさせてしまっていることもあります。言葉足らず、表現不足での誤解もあると思いますが、そのモヤモヤはそのままにせずぜひ話してください。話してもらえらることで、今まで当たり前にしてきたことの原点に立ち返り、あらためて考えることができます。それは大事なことなのか、見直す必要があることなのかがはっきり見えてきます。日々の生活の何気ないやり取りの中に、気付かせてもらえることがあると思っています。そう考えれば、どの子ども大事にされる保育の土台は、そこにかかわる保護者・職員がモヤモヤを話し理解し合える環境であること、大人も大事にされる必要があるのだと思いました。

2021年も残り1カ月、12月の年の瀬、そんなことに思いながら、また新しい年を迎えたいと思います。よろしくお願いします。